

## 書評

### Hilde Schmölder : Dunkle Liebe eines wilden Geschlechts Georg und Margarete Trakl

#### — ある Feministin の視点

三枝 絃一

2013年に刊行された、この書に付けた副題の、ある Feministin とは著者 Hilde Schmölder の謂である。彼女が Feministin の範疇に入ることは、その経歴、また、この著の論旨、論調から明らかである。

著者は、オーストリアの Steyr 出身で、長らくオーストリアとドイツの新聞及び雑誌のフリージャーナリストを勤め、1990年からは主に女性史に重点をおいた著作に専念している。彼女はオーストリアペンクラブの理事にも選ばれ、また1990年代に盛りあがってきた「女性問題」にジャーナリストとして参画し、女性イニシアティブの発起人の一人でもあった。主な著作としては、オーストリアの女性解放運動の先駆者 Rosa Mayreder の評伝 „ Rosa Mayreder : Ein Leben zwischen Utopie und Wirklichkeit “ (2002) がある。

この著書は、この Feministin から見た Georg Trakl とその妹 Margarethe の関係史であるが、マルガレーテの立場に立った論述である。いままで二人の関係は、ほとんど詩人を中心にして扱われてきたなかにあって、この点でユニークであり、取り上げる価値があると考え、書評を試みた。

トラークルの最愛の妹 Margarethe (愛称 Grete あるいは Gretl) は、一言で言えばまったく不幸な生涯を送った女性である。Schmölder は、彼女が次々と見舞われた数々の不幸とそれを生んだ背景を簡潔に列挙している。

「幼年時代には、受けた可能性のある、あるいはまた可能性の公算が高い（性的）暴行、冷たい母、早くからの親元を離れた暮し、虚弱な身体、ゲオルクによる独占と麻薬への彼の誘惑、女性としての不利な社会条件、挫折したキャリア、不幸な結婚、流産したか、あるいは墮胎した子供、厳しい戦争の時代」(S. 167)

Schmölzer は、マルガレーテが St. Pölten の寄宿学校に送り込まれたことに注目しているが、当時、女子を寄宿学校に入れることが貴族やブルジョワの習わしの一つであった。事実彼女の姉たちも寄宿学校に入れられた。しかし彼女たちは、そのときすでに 13、4 歳になっていた。これに対して 10 歳になったばかりのマルガレーテは地元の五年制の小学校を途中で退学させられて母の勧めにより遠くの寄宿学校に入学させられた。そのため当時師事していたピアノ教師 August Bruneti Pisano による教育も中断させられた。したがって、この転校の理由は、Schmölzer ならずとも「受けた可能性のある、あるいは可能性の公算が大である暴行」から兄妹を引き離すためであったことは想定できる。しかし著者は、ここに当時の男子と女子との扱い方の相違を強調している。つまり女子（マルガレーテ）を犠牲にしても男子（ゲオルク）を優先して救おうとしたと述べている。この転校については、Basil の評伝 „Georg Trakl “では 3、4 行、事実のみが述べられているだけで、その理由は記されていない。

(1) これに対して Weichselbaum の評伝 „Georg Trakl “では「グレーテが 10 歳で、すでに寄宿学校に入れられたことは、憂慮した両親の一つの反応であったかもしれない」(2) と述べられている。

次に「冷たい母」に関してであるが、よく知られているように、彼らの母は子供達の養育や教育をほとんどせず、それらを乳母や住み込みの家庭教師に任せて、自室に閉じこもり多くの骨董の品々に囲まれて過ごすのを常としていた、一風変わった女性であったが、この母について著者は、家父長制の犠牲者と見ている。夫 Tobias を、Basil は温厚な善人として描いているが、(3) 著者は、「人知れず起こっていたにもかかわらず、家族の雰囲気や決定づけた母の不幸を Basil は、否定した」(S. 14) と述べて、夫トビアスを仕事一辺倒で家庭を顧みず、妻にも理解のない男性と解している。（この著者と同じように Gunther Kleefeld も、その著 „Das Gedicht als Sühne “においてこの点を指摘している。）(4) それが彼女の神経を病ませ、結果的に子供を顧みない女性にしたと見ている。ただし末っ子のマルガレーテは、自分の手で育てピアノのレッスンにも立ち会ったとされている。この点で

はマルガレーテは「冷たい母」を他の子供たちほどは感じなかったかもしれない。著者はこの点については指摘していない。

更にマルガレーテは、兄ゲオルクと同じような高い芸術的な才能（彼女の場合は音楽のそれ）を有しながらピアニストとなりえなかったのは、当時の女性の置かれていた社会的環境が多分に影響を及ぼしていると著者は指摘している。当時は自立できる女性は、才能があつて財力を持つ女性に限られていた。マルガレーテの場合は、幼い時には父の事業が順調であつたが、次第に家業が不振に陥り、ついには廃業に至つたため、彼女の学業の継続が難しくなつた。

また彼女のベルリン時代は、第一次世界大戦が終局に向かい、食糧事情が極めて悪くなりベルリンでは数千人の餓死者が出た。こうした事情も彼女を更に苦境に至らしめた。それに彼女の墓の所在が不明になつたのも、この戦争のどさくさが一因をなしていると、著者は指摘している。更にこの時期、彼女は Buschbeck 等ゲオルクの友人たちに職の世話を頼んだが、その望みはいずれも叶えられなかつた。それは、当時は一度離婚した女性は差別され、就職の道もほとんど閉ざされていたためであつた。これら二つの点に関しては、Basil 及び Weichselbaum の評伝では触れられていない。

挫折したキャリアであるが、前述したようにマルガレーテは、10歳までピアノ教師 August Brunetti Pisano に師事していたが、それは寄宿学校に転校されたために中断された。この点を著者は強調していないが、言うまでもないことと考へたのか、しかし重要なポイントと言えるだろう。（もちろん寄宿学校でもピアノは練習していて、学校の行事に彼女が伴奏をした記録が残されている）その後彼女はウィーンの音楽大学で Paul de Conne に師事したが、欠席が多く受験の資格を得られなかつた。大学の年次報告によると欠席は「病気あるいはその他の理由」とある。この点について著者は、「彼女は実際病気だったのか、ウィーンは彼女にとって荷重だったのか、麻薬のせいなのか、教師の Paul de Conne のせいなのか」（S. 50）と疑問を差し挟んでいる。また他の箇所では、「Brunetti Pisano の形式ばらない気楽なやり方を評価したのである。彼女がウィーンの音楽大学で硬直した、徹底的に組織化された授業のメトードにより失敗したのも、その理由の一つであつたのかもしれない」（S. 41）と述べている。いずれにせよ、彼女は学業を諦めて 10 カ月ほど滞在したウィーンから帰郷した。その後マルガレーテは再びウィーンでピアノの個人教授を受けたがこれも中断した。翌年今度はベルリンの音楽芸術大学で Ernst von Dohnanyi（彼女がザルツブルクに帰っていた時、当地で公演した）に師事したが卒業試験を受けずに止めてしまった。この時点で下宿先の家主の甥 Arthur Langen と知り合い、婚約した。結婚は、はじめはランゲンがマルガレーテより 34 歳も年上であるこ

とで家族に反対されたが、ランゲンが彼女の学費をみるということで許された。理由として父トビアスの死後ますます実家の家業が傾いていたために援助をするのが難しくなっていた。しかしランゲンは職を失い、また多額の借金の返済に、彼女が受け継いだゲオルクの遺産（主に Ludwig Wittgenstein の寄付金）を当てたために、彼女は学業を諦めざるを得なかった。

確かにマルガレーテは音楽的才能に恵まれていたが、それが現実にとれほどのものであったのかは問われていない。条件に恵まれていれば、希望するコンサートのピアノ奏者になれたであろうか。すなわち幼い時に遠い寄宿学校に入れられず、つまりピアノ教師への師事も中断させられず、ウィーンでは病気（この理由として、著者は指摘していないが、その一因は麻薬中毒によるものではないかと推測される）にならず、またベルリンでの学業を中断せず（この理由は分からない、やはり「病気」のためか、あるいは実家の学費の支援が難しくなったためか）、その後夫ランゲンの学費の支援が受けられ、学業を継続出来たならば、ピアニストとして自立できたであろうか。この疑問は当然生ずる。しかし不幸が重なりピアニストへの道が閉ざされたのは事実である。

前にマルガレーテの不幸が列挙されたが、その中に兄ゲオルクの死が挙げられていないのが不可解である。彼女にとって兄の死は最大の不幸と言えるのではないか。もちろん他の箇所でも「ゲオルクの死によってマルガレーテは最終的に支えを失った。彼女はその後直ぐ夫ランゲンとも別れ、ますます深く麻薬に溺れ、負債を重ね、意気消沈に陥った」(S. 150)と述べている。おそらくゲオルクの死がなければ死を選ぶこともなかったであろう。彼女にとっては、ゲオルクは心の支えであったばかりではなく、ゲオルクにとってマルガレーテがそうであったように彼は最愛の唯一の男性であった。

著者 Schmörlzer の論の問題を孕んだ核心部分を引用する。

「この時代、また続く数十年にわたって、現実の、麻薬中毒の妹を、ゲオルクの文学における虚構の、賛美され、あるいはデーモン化された妹像と調和させることがトラークルの同好の士の間ではますます難しいと思われてきている。現実のマルガレーテはますます偉大な詩人の尊敬を受ける思い出の前に横たわる問題となった。それゆえ妹を貶めることによって兄のイメージを<純粹>に保つことが試みられる。ゲオルクの麻薬中毒、アルコール中毒、市民生活に地歩を築けない無能力は、彼の天才に帰せられた。そしてこれによってそれらは正当化された。マルガレーテの場合は、これに反して、これらの特性は、弱い、自分の意志を持たない、<創造的でない><sup>(5)</sup>、女性らしさの徴と見なされ

た。ゲオルクの飲酒が Karl Boromäus Heinrich によって<彼流に>何か<神聖なものとして崇められるもの><sup>(6)</sup>に高められ、また Karl Röck が労働省に就職一日後にはすでに彼が退職の申し出をしたことを „Helian “と関連させて<感動的で、それどころか震撼させる><sup>(7)</sup>と見る一方、グレーテはヒステリーで、<情緒不安定な女、そして気まぐれな信頼のおけないものになる>。<sup>(8)</sup>にもかかわらずデモーニッシュな性格を持ち、ゲオルクは彼女の虜になり、彼を彼女の<ひそかな挑発><sup>(9)</sup>によって誘惑する女になる。

彼女は彼の歪められた似姿になり<すでに根底から破壊された天才性の・・・保持者となり、><sup>(10)</sup>そしてあらゆる主体性が否認された<悪しきコピー>になる」(S. 151f)

先ずゲオルクの場合、その負の面、すなわち麻薬中毒、アルコール中毒、市民生活に対する不適応等は彼の天才によって相殺されるという論理の根拠を、おそらく Carl Dallago の言表に置いているものと思われる。それは、マルガレーテがインスブルックにいた時期にフィッカー宛の手紙の次の箇所である。「・・・トラークルは totale Verfallserscheinung である。しかしそれ自体きわめてまれな人間であり詩人である。彼の創造においては徹頭徹尾芸術家である。」<sup>(11)</sup>

著者はこれを敷衍して他の箇所でも次のような論理を導きだしている。

それは、ゲオルクの退廃は、むしろ、その天才性の証しであるということになる。そしてそれはマルガレーテを貶めることで相対的に高められるということになる。という論理である。

マルガレーテを「貶めている」典拠を、著者は主に Basil、Spoerri の論に、あるいは Lasker - Schüler の言表に取っている。Basil の評伝 „Georg Trakl “からの引用である語及び語句の前後を通して引用してみると ... sie, eine völlig Unschöpferische, die Machtvollere, Männlichere, vielleicht sogar Genialere von den beiden war — Trägerin allerdings einer schon an den Wurzeln zerstörten Genialität.<sup>(12)</sup>となる。したがってバーゼルは、マルガレーテが全く創造性を欠く人物としながらも、ゲオルクより天才的であると言っている。もちろんその天才性は根底において破壊されていると条件を付けているが。

Seine schlechte Copie<sup>(13)</sup> は Lasker - Schüler の言表である。彼女は他にマルガレーテを ein Gänschen, das schlau ist<sup>(14)</sup> (こずるい馬鹿女)とまで言う。これはゲオルクの死後、彼女がマル

ガレーテを慰めるために訪れた時のことを述べているフィッカー宛の書簡にある。Lasker - Schüler は妹に悪い印象をもった。それは互いに嫉妬心を抱いていたこと（妹は彼女が、自分が挫折した芸術家の道を歩んでいることと、この著者は指摘していないが、彼女がゲオルクを好いていたことをうすうす感じ取ったかもしれない）とマルガレーテが Lasker - Schüler がユダヤ人であることを知ってか知らずか、ユダヤ人について罵ったことが影響を及ぼしていると思われる。

他の箇所では Mahrholdt の *nur ganz ins haltlos Weibliche verschoben* <sup>(15)</sup>（ただ全く無定見な女性へとずれてしまっている）、Spoerri の *problematischen Verlorenen* <sup>(16)</sup>（問題が多い救いようのない女性）、その上 *Haltlose, Getriebene, Dämideomonische, Halbgeniale, und in sexueller Beziehung wahrscheinrich Aktiviere* <sup>(17)</sup>（無定見な女、ものに憑かれた、半デモーニッシュな女、半天才、性的なことにおいてはより積極的な女）という評を挙げている。あるいはまた Dallago は、彼女は *abstoßend* <sup>(18)</sup>（嫌悪をおぼえさせる）と言い、更に Ludwig von Ficker は、彼女はゲオルクという存在の *Abglanz*（名残り）、*Schatten*（影）<sup>(19)</sup>と言う。ただ、この Ficker の言、また Lasker - Schüler 及び Dallago のそれは、ゲオルクの死後、絶望的になり、生活の面でも苦境に陥っていて、言わば、なりふりかまわぬマルガレーテに対するものであるだけに、この点は差し引いて考えなければならないであろう。

マルガレーテに対するこれらの悪評は、確かに酷であると言える。しかし著者が述べているように彼女をこのように「貶める」ことによって相対的にゲオルクの価値を高めることができたのであろうか。この疑問に答えるためには二人が互いにどう見ていたのか、あるいはどう扱ったのか、また二人がどのように互いに影響を及ぼしあったのか、更に二人の関係はどのような意味を互いにもたらしたのかという観点から見ていかねばならない。

しかし二人の関係は、ゲオルクとマルガレーテの間に交わされた書簡が家族の手で隠滅されたこともあり、お互いをどう思っていたかについては、具体的な証言が少ない。

ゲオルクは、妹をどう見ていたかであるが、詩人のギムナージウム時代の友人 Franz Bruckbauer によると、彼女を *das schönste Mädchen, die größte Künstlerin, das seltenste Weib* であると言ったという。また『ボバリー夫人』の献辞に *meinem geliebten kleinen Dämon* (HKA I, S. 446) とある。これが、彼女がデモーニッシュな女性であったとする一つの論拠をなしている。またこれを裏書きす

るように、彼女はある手紙のなかで「私の性格には長い尖ったツメのある手が似合う。私は自分自身のために全てを破壊する」<sup>(20)</sup>と言っている。

ゲオルクは、この妹におそらく凌辱あるいはそれに近い事を働いた。と言っても、凌辱という字義通りのことがあったかは疑問視される。二人は兄妹として睦みあっていたわけであるから妹はある程度そうした行為を許していたと思われる。しかしもちろん近親相姦的行為はタブーであり、この点では当然罪の意識は生じるわけであるが。

姉 Maria Geipel 夫人の証言によると、彼は彼女を麻薬に誘いその中毒者にしてしまった。彼はもちろんこれに対して罪悪感を抱いていたが、これが結果的に彼女の人生を狂わせてしまった大きな要因になった。これが彼女の健康を損ない、おそらく学業の中断を余儀なくさせ、また流産に至った可能性がある。更に多額の麻薬代と酒代のため生活を困窮に導いた。彼女はゲオルクを虜にしてしまったという評があるにしても、彼女は被害者であることには変わりない。とは言っても、そのために彼女は兄を嫌い、忌避してはいなかった。逆に彼に信頼を置き、彼を最も頼りとしていた。それは彼が亡くなったときの深い悲しみ、絶望がそれを裏書きしている。一方ゲオルクのマルガレーテに対する態度から見た場合、Buschbeck の報告によると、彼は一生涯 *zärtlicher oder zorniger Sorge*<sup>(21)</sup>をもって彼女を見守っていたと言う。また Basil は、詩人は *unter Gretes körperlicher Untreue gelitten*<sup>(22)</sup> という。これはマルガレーテと Buschbeck との「Liebesaffäre」を指す。(ちなみに、これも事実である確証はなく、またこれを知ってかどうか分からないがゲオルクの Buschbeck 宛の手紙で <Lieber Fallot (詐欺師)> と呼びかけ、その後交際を断っている)。いずれにせよ、これらの証言は妹を思っただけのことであることは、明らかである。

妹がゲオルクの生活の、あるいは天才の発揮の妨げになったとは思われない。むしろ妹によってインスピレーションが与えられ、Schwester は、その文学の大きなファクターの一つになった。

結論として、著者 Schmolzer は、マルガレーテの立場に立って、論ずることによって彼女の一生に光を当てた。不幸に連続して見舞われ、ついには自殺によって、その命を断った彼女の生涯を、同情をもって叙述し、「貶められた」境涯から救い上げようと試みている。ただし、ゲオルクにより「凌辱」あるいはそれに近いことを受け、また麻薬を覚えさせられ、その中毒によって人生を狂わせてしまっても、生涯にわたってゲオルクを忌避、非難せず、逆にゲオルクを頼りにし、慕っていたことに

ついて、その理由を述べていない。この点に関しては、Basil も Weichselbaum も言及していないが、Feministin である著者こそ論ずべきであろう。

いずれにせよ、彼女の人生は同情してもし尽くせないし、確かに彼女についての多くの良くない評言は、そうした傾向がある程度彼女に認められるにしても、いささか極端であり酷であり、不当に近いものもあるのは明らかである。また兄と妹の関係から見れば、やはりゲオルクがマルガレーテの不幸の引き金になっていることは疑いえない。ゲオルクの退廃的逸脱は、逆に天才の証しであるかのようになり、それが是認されている一方、マルガレーテの弱点は、弱点として強調されている、と著者は主張する。ただゲオルクの純粋性を保ち、彼の天才性を高めるためにマルガレーテを貶めたという論には飛躍があり、与することできない。また彼女を「貶める」ことが意図的になされたという解釈も首肯できない。しかし彼女に不幸をもたらした一因をなした当時の時代背景の中で彼女を捉えた点など掬すべき点も散見する。

#### テキスト

Schmölzer, Hilde : Dunkle Liebe eines wilden Geschlechts Georg und Margarethe Trakl Narr  
Francke Attempo Verlag Tübingen 2013

#### 註

- 1) Basil, Otto : Georg Trakl mit Selbstzeugnissen und Bilddokumenten Hamburg 1965 S. 76
- 2) Weichselbaum, Hans : Georg Trakl Eine Biographie Salzburg 1994 S. 60
- 3) Basil, Otto : a. a. O. S. 23
- 4) Kleefeld, Gunther : Das Gedicht als Sühne Georg Trakls Dichtung und Krankheit Eine psychoanalytische Studie Tübingen 1985 S. 68
- 5) Basil, Otto : a. a. O. S. 70
- 6) Heinrich, Karl Borromäus : Die Erscheinung Georg Trakls in : Erinnerung an Georg Trakl Salzburg 1966 S. 114



- 7) Kofler, Christiane : Karl Röck Tagebuch 1891—1914 3Bd. Salzburg Bd I S.169
- 8) Spoerri, Theodor : Georg Trakl Strukturen in Persönlichkeit und Werk Bern 1954 S.40
- 9) Spoerri, Theodor : a. a. O. S. 90
- 10) Basil, Otto : a. a. O S. 70
- 11) Ficker, Ludwig von : Briefwechsel 1914 1925 Brief vom Jänner 1915 Hg. von Ignaz Zangerle, Walther Methlagl u. a. Innsbruck 1988 S. 79
- 12) Basil, Otto : a. a. O. S. 70
- 13) Mclary, Laura A : The Incestuous Sister or The Trouble with Grete. In Modern Austrian Literature, Volume 33. Number 1, Houston, Texas, 2000 S.45
- 14) Ficker, Ludwig von : a. a. O. S. 72
- 15) Mahlholdt, Erwin : Der Mensch und Dichter Georg Trakls In : Erinnerung an Georg Trakl Salzburg 1966 S.36
- 16) Spoerri, Theodor : a. a. O. S. 39
- 17) Basil, Otto : a. a. O. S. 16
- 18) Dallago, Carl : In : Ficker Briefwechsel 1914 1925 S. 79
- 19) Ficker, Ludwig von : Nachruf am Grabe In Erinnerung an Georg Trakl Salzburg 1966 S. 254
- 20) Weichselbaum, Hans : Die Briefe von Frau Margarethe Langen, geb. Trakl (1891–1917) In : Androgynie und Inzest in der Literatur um 1900 Salzburg 2005 S. 214
- 21) Buschbeck, Erhard : Georg Trakl—Ein Requiem. In Mimus Austriacus Hg. v. Lotte von Tobisch. Salzburg 1962 S. 64
- 22) Basil, Otto : a. a. O. S. 71

## 2015年度活動報告

1. 5月30日(土)2014年度春季総会・研究発表会が豊島区地域文化創造館において開催された。

### 総会

- (1) 『トラークル研究』第十二号の発行は、10月1日を目途に発行する。
- (2) 『トラークル研究』第十一号について
  - 1) 独文学会において希望者に配布する。
  - 2) 正誤表を会員に送付する。
- (3) 2015年度秋季総会及び研究発表会：10月3日(土)鹿児島市の公共施設にて開催予定
- (4) ホームページについて  
本会のホームページの開設報告。掲載事項(挨拶、協会会報及び研究報の論文等)
- (5) 特集号を日本独文学会で配布する。
- (6) 2015年度春季総会・研究発表会  
期日：5月28日(土) 会場：日本独文学会会場(獨協大学)に近い公共施設を予定
- (7) その他
  - 1) 重要な討議事項がない場合、幹事会は持ち回りにする。
  - 2) 会員保坂直之氏を編集委員(査読委員)に委嘱する。
- (8) 本会の2014年度決算が承認された。

### 研究発表会

- 保坂直之 : 『冬の夕べ』の位置で考える連作「孤独な人の秋」の構成意図  
高橋喜郎 : トラークルの詩における gelb と golden について

2014 年度決算報告

トラークル協会 2014 年度決算報告			
自 2014 年 4 月 1 日 至 2015 年 3 月 31 日			
収 入 の 部		支 出 の 部	
科 目	金 額	科 目	金 額
繰越金	1 0 2 1 0 1	会場費（京都テルサ）	3 2 4 0
本年度会費	3 4 0 0 0	切手代	7 8 7 0
		「トラークル研究」第十一号印刷代 （振込手数料・消費税を含む）	4 8 7 9 7
		速達料	3 8 0
		封筒代	7 8
		葉書代	7 8 0
		コピー用紙	3 2 4
		パソコン用インク	7 1 8
		郵便	6 0 0
		ゆうめーる基本	3 4 4 0
		本年度支出合計	6 6 2 2 7
		次年度へ繰越	6 9 8 7 4
		（内、本年度剰余金	- 3 2 2 2 7）
合 計	1 3 6 1 0 1	合 計	1 3 6 1 0 1

2. 10 月 3 日（土） 2015 年度秋季トラークル協会総会・研究会が鹿児島市青少年会館において開催された。

総会

(1) 『トラークル研究』第十二号の発行の予定について

(2) 2015 年度春季例会：5 月 280 日（土）、日本独文学会の会場（獨協大学）に近い公共施設を予定、発表者・論題の募集

(3) 本会のホームページ掲載事項の追加

- 1) トラークルの主要な詩とその訳詩の掲載（希望者が詩を幾つか選び翻訳する）
- 2) 会員の他の研究誌に掲載されたトラークル関連の論文名のリストの掲載
- 3) ホームページに掲載された論文の要約とそのタイトルのドイツ語化
- 4) 会員のトラークル関連蔵書目録の作成と開示

#### 研究発表会

伊藤卓立：トラークルの詩における *purpurn* について — 試論 —

（三枝紘一の発表：トラークルの妹を巡って — ある Feministin の視点 は時間の関係で次回に持ち越しになった）

4. 3 月 1 日（火）2015 年度幹事会が開催された。

### 会員消息

退会：岸田孝一

新会員：尾内達也

### お知らせ

1. 2017 年度春季研究発表会に発表希望の方は、2 月末日までに論題をお知らせください。
2. 「トラークル研究」第 14 号に論文等を発表希望の方は、2 月末日までにお知らせくだ

さい。

3. 会費未納の方は、御納入のほどよろしく申し上げます。

---

## 編集後記

「トラークル研究」第十三号をお送りします。

遅くとも年末までに発行できるようにと心がけてきましたが大変遅れて申し訳ございませんでした。主な理由は、各編集委員が多忙であったこともあり、また私のパソコンが編集途中で故障してしまったこともありましたが、結局私の手配の仕方や処理の拙さに帰せられます。こころよりお詫び申し上げます。

文学作品は、それが完成された時点で、より確定的には公にされた時点で作者から離れ独立した存在になるとされています。そうした観点から解釈がなされるべきです。具体的に言えば、その創作に籠められた作者の意図が当然あるわけでありますが、その意図が果たして作品に十分に表現されているかどうかは問題となります。解釈者が作者の意図を忖度するのはよいのですが、またそれが解釈に立体性を与えることにもなりますが、その意図が十分表現されていない場合がありますし、また逆に作者の意図以上に表現されている場合もあります。当然ですが解釈者は作者の意図よりも表現されたものに重点を置き、評価すべきで、特に表現が作者の意図を超えてしまっている場合は、それが言えるでしょう。むしろより良い解釈は、この作者の意図を超えた表現を云々すべきでしょう。優れた表現者であれば、それは往々にして起こりうることと思われます。作者にとってもむしろその意図を超えた表現を解釈者に指摘されれば喜びとすることでしょう。このことは極めて簡潔な、多義的な表現に富むトラークルの詩にもよく当て嵌まると思います。(さ)

# トラークル協会会則

1995年 9月20日制定

2003年10月18日改正

2004年10月 1日改正

2005年 5月 3日改正

第一条（名称）本会はトラークル協会と称する。

第二条（目的）本会はトラークル文学の普及及びその研究の促進を図ることを目的とする。

第三条（事業）本会は年2回総会・研究発表会を開催する。また年一回研究誌を発行する。

その他本会にかなう事業をする。

第四条（会員）本会の会員はトラークル文学及びその時代に関心を有する者とする。

第五条（役員）本会は会長（あるいは代表幹事）をおくことができる。

また若干名の幹事及び編集委員（査読委員を兼ねる）をおく。

会長（あるいは代表幹事）幹事及び編集委員（査読委員を兼ねる）は総会において選出する。

会長（あるいは代表幹事）、幹事及び編集委員（査読委員を兼ねる）の任期は2年とし、再任を妨げない。

第六条（顧問）本会には顧問をおくことができる。顧問の委嘱は総会で決定する。

第七条（会費）本会の経費は会費、その他の収入によって支弁し、会費は年額2000円とする。

第八条（決算）本会は毎年度決算をし、総会に報告する。

第九条（改正）本会則の改正は総会の出席者の3分の2以上の賛成を必要とする。

（備考）本協会の事務所在地を当分のあいだ、三枝紘一気付とする。

『花の色―芭蕉・蕪村とリルケ、トラークル』：正誤表

	誤	正
訂正箇所(ページ/行)		
1/30	「色彩語」とて	「色彩語」として
2/19	『読書ノ学』	『読書の学』
3/15	「深紅」	「深紅」
3/22	(Rotgelb)	(Rotblau)
10/16(行末  17行頭)	…何やらゆかし  とされた	…何やらゆかし  とされた…
10/32	『牧野植物大辞典』	『牧野植物大図鑑』
11/1	『牧野植物大辞典』	『牧野植物大図鑑』
14/8:(『奥の細道』引用)	心許な日かかず	心許なき日かず
18/15:(『青色のあじさい』第2行)	色はくすみ	色はくすみ
19/5	「対象的に把握する」するのは	「対象的に把握する」のは
19/7	「このあじさい」の「花の色」	「このあじさい」の「花の色」
19/15	以外にも	意外にも
20/20	「比喩的語法が	「比喩的語法」が
21/7	バラ(rose)	バラ(Rose)
22/7	「内部」の「自体」は	「内部」の「事態」は
23/24(行末  25行頭)	『新詩集』の「  様式的相貌」	『新詩集』の「  様式的相貌」
24/3	…がれ事態	…がれた事態
24/4	[内部]の事態	「内部」の事態
24/12	「事物詩」	「事物詩」
26/1	『静かに』Leise	『静かに』Leise
26/20	Die schweigende Finsternis	行頭を描える
26/27	未梢	抹消
28/1	[酔い痴れた]…[顔]	「酔い痴れた」…「顔」
28/2	[蒼ざめる]…[金色]	「蒼ざめる」…「金色」
29/4~6	[私]/[悲しみの堇の花色]/[私]	「私」/「悲しみの堇の花色」/「私」
30/11~12	[未完了相]/[完了相]	「未完了相」/「完了相」
30/22	(schwarz)/(weiß)	(Schwarz)/(Weiß)
33/11	(Die drei Teiche …1-2V. …)	(Die drei Teiche …1-3V. …)
36/23(行末  24行頭)	(Metaphernsprache)	(Metaphern-  sprache)
37/36	『俳句ノ花図鑑』	『俳句の花図鑑』